

## 国語科学習指導案

日 時：平成 27(2015)年 6 月 17 日(水) 14:10-15:00

場 所：東京学芸大学附属世田谷中学校図書館

対 象：東京学芸大学附属世田谷中学校 3 年 D 組 40 名

授業者：渡邊 裕

### 1, 単元名

学校図書館との協働を軸とした情報活用力への働き掛け～「批評」を考える～

※キーワード：蓄積と参照／顕在化／読書経験と活用

### 2, 単元設定について

#### (1) 教材化にあたって (実態を踏まえて)

##### ①育てたい能力に関する生徒の実態とめざす方向

中学入学から授業者が受け持つ学年であり、これまでにマッピングや発表活動、ポスターセッション、タブレット端末を活用したプレゼンテーションなどを取り入れた授業を行ってきた。また、文章などにある「情報」にどのように向き合い、自分の考えに接続していくかということ問い続けている。さらに、根拠を明確にすることや資料の扱い方も段階的に課題を提示し、取り組んできた。

今回授業の対象となるクラスは、互いの意見を交流する場面では活発な様子を見せ、相互に刺激し合いながら考えを進めていくことができる。一方で、自ら意見を切り出すことは苦手である。誰かが口火を切ればそれに追随した発表などにつながるが、周囲の様子を気にしながら後の先をとるような様子が多く見られる。また、丁寧な取り組みも見られるが、見本のように外的な規範が提示されないと手が止まってしまう様子もある。(三年生になりどのクラスの生徒も「感想」を書くことの難しさを感じている)

そこで本単元では、「感想」から「批評」へ展開していくことを通じ、他者を意識するとともに、自らの意見を補強する「情報」の扱い方について改めて考えてみたい。一つの事柄を他に応用していく力は優れているため、この経験を通じ、「読む」活動や「書く」活動でも、「意見の核を明確にする」力を育むことを期待する。

※本単元は竹田青嗣「『批評』の言葉をためる」(光村図書)の学習とのつながりから、「批評」については竹田の示すものに準じて考えている。

##### ②教材化にあたって力を入れた点・工夫した点

一つの単元だけで閉じることなく、そこに到るまでの経験を活かせるような活動を取り入れていく。また、抽象的を高めた問いから対象を捉えることで、一つの例として扱った事柄を他へ応用していくように促している。さらに、それぞれの段階を「言語化」して提示することで、ねらいを絞りつつ汎用性を高められるようにした。また、「経験」ということの重要性を価値づけたい。

このような考えをもとに、万葉集の歌について、「感想」の段階(良い／悪いなど感覚的な)段階を出発点とし、その歌について調べていく活動を取り入れた。そこで得た「情報」をもとに、「批評」へと展開していく中で、資料の収集や活用について改めて考える機会を設ける。(資料そのものの検証については、それぞれの調査の段階で、複数の資料に当たる様子、比較しながら自分の意見を補うものはどれかを検証する様子がみられた)

このような活動のなかで、自分が受け止めた感覚的なものを言語化していく過程の構造を顕在化し、「効果的な表現」のようにいわれるものについて実体験から考えていけるようにする。

## (2) 教科の研究主題を受けて（「創造」を捉える）

### 教科研究主題

「確かな言葉を通して豊かな気づきが生まれ、他者との共有を通して自分の「新たな捉え」を生み出す生徒の育成  
(中学校三年間のことばの学びを通した『創造』の育成)

### ①この単元で捉える「創造」とは

これまでの学習活動や学習内容を踏まえ、なにかを「つくりだす」段階にたどり着く過程では、個としての知識・思考の深化はもちろん重要だが、その段階にのみとどまるのではなく、他者や集団に目を向け、学び合うことに結び付けていくことで、それらの効果や意義を実感してくれることを期待する。

本単元において「創造」に結びつくものとして想定しているものは、「批評」に展開するにあたり、自らの「ことば」を問い直す場面である。既有知識を結びつけ新たな捉えとして提示すること、根拠の結びつきを見出していくという点において「創造」に結びつく活動であると考えられる。

その下地となるのが、「自らが選択した歌」を対象とした調査である。直感的に得たものが、一般的にどのように語られているのかを把握することで、それらをいかに「自らのことば」に落とし込むのか考えなければならない。そのなかで、判断の軸を意識し調べたものをいかに選択するのか検討する様子が見られる。

ここで見出された「情報」は「確かさ」を保証するものになる。その観点を活かし「批評文」という、「目的」を明確にすることで、思考の方向性、見通しを持った取り組みに結びつけていく。

また、「創造」への手立てとして「見出し」を考えることにも取り組む。インターネットなどの環境が身近になるなかで、「限られた文字数で意図を伝えること」「限られた文字数で表現されたものから具体的なものに進むか否かを判断すること」はこれまで以上に重要なものになると考える。この活動を取り入れることで、自分自身の認識を把握することにもつなげたい。

### ②本単元の提案と可能性

#### a) 国語科の視点から

(経験を活用し、視点と根拠を明確にすることを通じ、表現の多様性を意識化する)

学習内容や経験（本単元では修学旅行が大きく影響する）を単独で理解するのではなく、それらの結びつきを活用することでの学習効果を期待する。また、随筆や説明文の学習から得た「言語」に対する視点と『万葉集』という古典世界と現代的な感覚の接点を作り出すことで、相違点・類似点を発見、そこから理解を深めることを目指していく。そのうえで、「批評」という一つの定義をもとに、資料の活用や交流活動を通じ、「理由」「根拠」の違いを含め、伝達効果ということへ目を向けていく。

#### b) 情報活用力・図書館連携の視点から

三年間を通じて、一つの教科だけでなく、いろいろな場面で図書館活用・資料活用についての経験を重ねてきた生徒たちが、それらの力のある場面でどのように活用していくのかを見ていく。そのうえで、授業と学校図書館の協働に関わるモデルの作成を目指す。

#### ◆「平成27年度 学校司書資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究」の取り組みとして

学校図書館との協働または学校図書館の活用という授業実践を見ていく中で、その効果の連続性・重層性に目を向けたものは少ないのではないかと感じる人が多い。また、他の場面での応用性について考えるための指標の把握が難しく、活用されきっていないということもあるのではないかと。

そこで今回は、実際に行われた授業をもとにして、学校図書館と授業の結びつきのモデルを構築することを考えていきたい。情報辞活用については、「蓄積」をいかに活用することができるかが重要な点の一つである。そのためには、その「蓄積」の中から目的にそったものを「参照」することが前段階にある。さらにそれを「顕在化」する経験を繰り返していくことで、知識や能力の定着が図られ

る。この状態を附属世田谷中学校67回生の取り組みをもとに整理してみることで、話題を共有し、議論する場が「つくられる」こともあるだろう。このように、本事業の報告が「活用」されることで重要であると考える。

※「蓄積」に関しては、「自己内蓄積」だけでなく、例えば図書館や書籍が持つ空間的な「蓄積」も想定している。またそこ点を踏まえて活用していく観点に「ネットワーク性」（図書／ウェブ）が挙げられる。

### c) 校内研究活動として

学校図書館との協働の一例を提示することで、学校図書館活用の深化・発展のきっかけとなることを期待する。また、各教科で共有できるツール（読書・情報ファイル、名刺サイズの情報カードなど）についての紹介ということも行いたい。

「情報活用力」については、モデル図にとして提示したものは「学校図書館を活用した」という点での授業実践のみを取り出したものであるが、多様な教科の取り組みによる効果や蓄積は大きい。そこで、協議を通じ、各々の教科の取り組みについて意見をj得ることで、「情報活用力」に関わるカリキュラムの整理・提案を目標としたい。

（段階例として全国学校図書館協議会の制定した「情報・メディアを活用する学びの指導体系表」を参考にする）

### ③単元のつながり

「育てたい能力に関する生徒の実態とめざす方向」で示したような、思考整理の過程や発表方法など方法的な面での積み重ねがある。また3年生では、各単元のつながりとして、「ことば」と「経験」ということをキーワードとしている。教科書教材をもとに、「ことばと表現」に着目していく。その中で、その作品がどのような文脈の中にあるのかも考えていくようにしている。そのような個々の知識や情報を結び付けていく中では、教科の枠にとどまることのない既有知識の連動も見られる。

## (4) 評価について

### ①評価基準と評価規準について

本単元では、「批評」へ展開していく段階で「万葉集」や和歌に関する基礎的な内容の理解と活用を図ること。「批評文」を書く段階では、自分の視点を明確にし、他者へ伝えるための表現に結びつけること。調査・統合の段階では、資料を適切に活用し、情報のつながりを考えていることなどを挙げることができる。

### ②育てるための評価活動

抽象的な段階での捉えを具体化し表現していく取り組みから、自分の思考の方向性を認識し、（メタ認知的取り組み）相対化したうえで他の他者意識が重要である。さらに、思考を整理していく過程で、構造化すること、相互の関連を見出していくこと通じ、思考の軸を定めることを意識化する。これらの活動を行うに当たり、生徒自身がこれまでの経験をもとに応用していけるようにする。

### 3, 学習指導の全体計画 ※斜体については、教科学習内容とともに活用するもの

次・時	ねらいと学習内容	学校図書館・情報活用
0 (単元の 前の積み 重ね)	<ul style="list-style-type: none"> <li>『万葉集』に関わる知識・理解</li> <li>※修学旅行での「万葉歌碑」を見つける活動</li> <li>説明文「『批評』の言葉をためる」</li> <li>テーマ別読書（読書記録カード）</li> </ul>	<b>図書館協働</b> <b>授業に関わる資料の補強</b> <b>公共図書館や他附属図書館からも資料を借り受け</b> <b>万葉集のコーナーを図書館に設置</b>
<b>第一次 経験を活用し、「批評」のための要素を明確にする</b>		
1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>「万葉集」の中から任意の一首を探す</li> <li><b>内省／一般的な評価(スタートとなる一つの情報)</b></li> </ul>	<b>図書館協働</b> <b>万葉集のコーナーを図書館に設置</b>
2時	<ul style="list-style-type: none"> <li>「批評」の前段階における「感想」を記録する。</li> <li>相互交流をもとに、中心とした「視点」を明示する。</li> </ul>	
<b>第二次 「批評」を考える：「情報」の収集と資料の活用（デジタル・アナログの選択／融合）</b> <b>：背景にあるものにも目を向け、歌を捉え「批評」につなげる。</b>		
3時	<ul style="list-style-type: none"> <li>「批評」に関わる歌の「要素」について調査する。</li> <li>「要素」をもとに「感想」の「理由」を明らかにし、「批評」につながる「根拠」を補強するための調査を行う。</li> </ul>	<b>情報活用／図書館協働</b> <b>関連項目に関する本の別置</b> <b>思考整理に関わる本の別置</b> <b>→情報源に関わる注意事項の再確認</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>これまで学習した方法をもとに、方向性（「要素」）を定めた上での調査を行う</li> </ul>
4時 <b>本時</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査をもとに、「批評文」のプロットを考える。</li> <li>情報の選択や追加調査を行う。</li> </ul>	<b>調査に当たっては随時教員や司書に相談をしながら</b>
<b>第三次 「表現・伝達」のために：視点を明確にし、共有の観点をふまえ自らの考えを表現する</b>		
5時	<ul style="list-style-type: none"> <li>「批評文」を書き上げるとともに、「見出し」の効果を考える</li> <li>「批評」をもとに「視点」を明確にしたうえで、同様の観点からの「おすすめの本」を選び、紹介する。</li> </ul>	<b>読書経験／図書館協働</b> <b>「見出し」について、書籍を例にその役割と効果を</b> <b>確認した上で、推敲する。</b>

### 4, 本時の学習指導

#### (1) 本時のねらい

(言語活動を通した内容的側面)

「批評文」の構造を段階的に検討することから「情報の連続性や提示の方法」を考えていくことで、「意見の軸」を意識化し、伝達の工夫に結びつける。

(言語技能としての方法的側面)

- ・視点を明確にし、意見交流を踏まえて自己の考えを補強する。
- ・「伝達」性を高めるために、情報の結びつきを考える。
- ・図化を用いることで話題の展開を見直し、思考過程を活かした資料の作成を行う。
- ・メモから情報を選択・追加していく中で、表現の効果（他者意識）を明確にする。

#### (2) 本時の評価

- ・調査した事柄をもとに、感想を土台として話題の展開を考え、自己の意見の補強・深化につなげることができる。
- ・考えの軸を明確にし、情報の収集や選択を通して他者の理解を促す工夫に結びつけることができる。

(3) 本時の展開

分	学習事項と学習者の反応 (☆)	○留意点◇手だて●評価
5 導入	1 本時の活動の流れを確認し、各段階の目的を意識化する。	○これまでの個々に行われ事柄のどのよう に結びつけるか再確認する。 ◇ホワイトボードでの視覚化 ◇「批評」の特徴の再確認 ○複数の活動があるので、時間に注意するよ う促す。 ◇「創造」への設定 テーマ・調査資料・見出しの位置づけ、「 批評」それぞれ何を示すのかを共有する。
<p>本時のねらい</p> <p>「批評文」の構造を段階的に検討することから「情報の連続性や提示の方法」を考えていくことで、「意見の軸」を意識化し、伝達の工夫に結びつける。</p>		
20 展開Ⅰ	2 「批評」のテーマを設定し、骨格を考える (20) -1 テーマとなる事柄を設定する。 -2 テーマをもとに「批評文」の骨格を考えていく。 ・事柄→「批評の言葉」→補強する資料 を組み合わせる -3 追加調査の必要があるものについて調べる ☆集めた情報を検討・精選せず、そのまま全て用いようとする。 ☆調査したことの羅列になってしまっている。	◇ワークシートを用いて、テーマ→骨格→見 出しと段階的に考えるよう促す ○「感想」から「批評」に転換していくにあ たり、調査を踏まえたテーマを考えた手掛 かりにする ○調査で得られたものの位置づけを確認 ◇順序については問わない。 資料から事柄の整理も可能であることも 示す ◇集めた情報のうち、どの部分が中心的な話 題化を考える。 →いかに情報を結びつけていくのか。 ●課題の取り組み (机間巡視・作成資料)
<p><b>自分の「批評文」にふさわしい見出しをつける</b></p>		
20 展開Ⅱ	3 それぞれの「『批評』の流れ」を交流し、伝達性を検討する (10) -1 互いの骨組みに対し、意見や疑問点を挙げる (グループ) -2 つけられた付箋紙をもとに、推敲作業を行う ※特に「『批評』の言葉」について検討する -3 追加調査の必要がある事柄を整理し、調べる  4 「批評」の見出しを考える (10)	◇付箋紙を使用 ○調査結果の報告のみにならない よう、「批評」の方向性を再確認 する。  ◇見出しの役割を考える ○見出しについては20字以内、文学的表現 ではなく、簡潔に内容を伝える機能から考 える。 ●情報の活用の仕方と焦点化 (提出資料)

5 まとめ	5 次時の活動と文章化の見通しを持つ。 「見出し」の役割について考える。 →論の中心との結びつきから焦点化していく	○展開を踏まえ、自己の意見を顧み、論の中心となる事柄を定めるように促す。
----------	---	--------------------------------------

4) 板書計画

